

シリーズ「語りえぬものを問う」国際シンポジウム

語りえぬものを問うⅢ

——身体・空間・感性——

S'interroger sur l'implicite Ⅲ—Corps, Espace, Sensibilité

2005年10月30日(日)

関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス 関西学院会館

共催：日仏社会学会

〈講演〉

アラン・コルバン (Alain Corbin) (歴史学者)

「身体と風景の構築」

アンリ=ピエール ジュディ(Henri-Pierre JEUDY) (フランス国立科学研究センター研究員)

「未来のための記憶」

荻野 昌弘 (関西学院大学大学院社会学研究科教授)

「暴力の風景」

〈通訳〉

小倉 孝誠 (慶應義塾大学文学部教授)

渡辺 響子 (明治大学法学部助教授)

〈司会〉

山上 浩嗣 (関西学院大学社会学部助教授)

国際シンポジウム「語りえぬものを問うⅢ－身体・空間・感性」報告

風景という語りえぬもの

——感性による風景構築、負の記憶と風景、暴力の風景——

前田 至剛*

キーワード：感性の歴史、風景の構築、負の記憶、記念碑、暴力の風景

2005年10月30日、関西学院大学 COE プログラム国際シンポジウム「語りえぬものを問うⅢ－身体・空間・感性 (S'interroger sur l'implicite Ⅲ－Corps, Espace, Sensibilité)」が開催された。このシンポジウムは、身体・空間・感性といった我々にとって非常に馴染み深いものでありながら、それを語ることが極めて困難な対象に科学が如何に対峙しこれを明らかにするか、このことを探求するために捧げられている。そこで社会学と歴史学の先端的研究者の講演と、本 COE プログラムで取り組んでいる研究の一つ、アニメーションによる語りえぬものに対するアプローチとして「暴力の風景」が上映され、活発な議論が展開された。具体的な講演と議論の内容は以下。

風景の構築と身体

まずコルバン氏から、風景と感性との関係についての講演がなされた。風景とは単なる物理的な環境だけでもなければ、視覚的にのみ捉えられるものでもない。それは複雑な感性（五感とそれを知覚した人々の情動や思考）によって捉えられ、その経験が重なり合うことによって風景として構築される。氏はこの風景の構築が、主として18世紀以降の西洋において、どのように変化してきたかを明らかにする。

*関西学院大学

たとえば18世紀末以降、天候に関する感受性が鋭敏になり、人々の内省作用にも影響を与えた。それは哲学者ジュベールの日記、ルソーの「孤独な散歩者の夢想」をはじめ、このころ広く一般的におこなわれるようになった日記という形式に見出せることだ。あるいは、18世紀後半における「浜辺」という風景の発見・構築。それまで恐怖と嫌悪の対象であった「浜辺」が、男性にとっては海と対峙し挑戦すること、女性にとっては肌を晒し波に触れ男たちから見られるという皮膚感覚として経験され、新たな浜辺の風景が構築される。

こういったいわば個人的な風景の構築以外にも、社会の風景も感性全体を考察することなしに明らかにし得ない。パリという大都市の風景を例にとると、18世紀末のパリにおいては音の風景が極めて濃密であった。たとえばパリの物売りの声は、いわば「社会の音楽」であった。身体活動に対応した呼吸のリズムは、労働の熱意・仕事の効率化をもたらすだけでなく、出身地を明示し、民衆の善良性を示すなど社会的指標となっていた。その後機械のブンブンという音が一般化し、人の足音や手仕事の音が消え、人々の感覚能力も衰える。機械の無秩序な音によって構築される風景は、異質な時間・空間の錯綜、人とモノの移動が絶えず加速している社会状況を反映している。この近代性の風景といえるものの最も象徴的なものは、鉄道とその駅の風景である。文豪ゾラの小説に怪物として描かれている機関車は、声、喘ぎや煙を放ち、いまにも爆発しそうな機械である。そして駅は、時間の正確さ、コントロールされる群衆にまぎれ遅刻するのではないかという不安、駅という新たな規則を熟知していないのではないかという恐れ、これらが人ごみに紛れ群衆の音が天井に跳ね返る駅という迷宮に入り込んだ孤独な人間に襲い掛かった。こういった駅の風景は、マネやモネの絵画にも描かれている。

こういった近代化の過程に関して、嗅覚に焦点をあて匂いの歴史を析出することもできる。疫病の原因が、空気や大地の汚染によるものという考えがあったころには、沼地の風景とは視覚的なものというよりその悪臭が、熱

気、微生物のかすかな音と重なることによって地獄の風景として構築された。その後科学的知識、とりわけパスツール理論の勝利によって脱臭化されていくのは、近代化の過程とも対応している。

以上、コルバン氏からは極めてユニークな「感性の歴史」という側面からの講演がなされた。

記念碑と記憶、現在化の論理

ジュディ氏からは、過去の記憶が建築家／芸術家による記念碑によって喚起され「歴史」が構築されること、これが都市の風景をなしている現象について講演がなされた。

近年さまざまな場所で記念碑が作られ、記憶が喚起されるとき、そこには記憶の現在化あるいは現在主義という傾向がある。たとえば、ユダヤ人大量虐殺がどのようなものであったかを「証言」によって語る時、この生きた記憶が、現在において現実であるという幻想を生み、「証言」をめぐるパトス（情動）が利用される。このパトスの利用なくして歴史を巡察することができなくなっている。ここでいう「歴史」とは、連続的で直線的なものではなく、再び巡察され絶えず現在化されていくものとなる。

ではこの現在主義という傾向の中で活動する建築家／芸術家は、記憶とどのような関係にあるのだろうか。たとえばベルリンのユダヤ人博物館¹⁾は、そこに足を踏み入れた者が、あらかじめ与えられているものを見聞きするのではなく、自分の解釈によって一定のフィクションを分担し得るバッファーを得て、見学者自身がいわば証人となる。これによって道徳至上主義の名の下に唯一無二の真実が強制されるのを避けている。このことから分かるように建築家／芸術家は、記憶をお定まりの枠組みに当てはめ、想像や解釈の可能性を阻害するのではなく、「現在における過去」を未来へと開くことを促さなければならない。その作品は、「記念すべきもの」について多くの人々が利用する象徴的レファレンスとなるからだ。未来を展望する可能性を過去

から引き出し得るよう文化的・政治的な責任が嫁せられている。

他にも多くの例がある。ドルドーニュ地方の村に建てられたオバリスク²⁾は、記念する芸術とは縁を切り、一時的で変容する時間に組み込まれている。常に村の人たちが碑文を書き、地面に無造作においていくことによって記念碑を造り続ける。碑文や記念碑の出現と消失というアイデアを用いて、無数の耳障りな記憶のポリフォニーが出現し、現在と積極的・相互的な関係が作り出されている。この現在主義という観点からするとモニュメントの機能は、精神分析における抑圧回帰に似たメカニズムを備えている。消失、欠落といったものが記憶を現在において活性化するためにもちいられる。

このように考えるとテロや戦争といったカタストロフィが、このメカニズムを駆動するのも不思議ではない。集団の高揚が政治的に管理され、恐怖のヒューリスティックとなる。これはニューヨーク WTC 崩壊後の再建計画にも見られる。したがって、記憶の実践は共同体のセラピーとしての重要性をもつ。それは負の記憶を追い払わずに治療する。しかし、逆に未来を閉ざしてしまう効果を生むこともある。罪悪感と脅威の記憶が未来に影を落とし、多くの理想を根絶してしまうこともある。だからこそ、建築家／芸術家は、記憶すべきものに形象を与えよという政治的要請に答えつつ、未来の自由な問いを造ろうとする。

こういった現象が街全体に風景として広がっているのがベルリンだ。それは決して癒されない傷を永遠に耐える永久に証人であり続ける街だ。たとえばベルリンのユダヤ人に捧げられた記念碑³⁾は、ユダヤ人墓地を想像させる。隣にあるライヒスターク (Reichstag) には統一ドイツのシンボル「ガラスのドーム」が取り付けられている。これは記念碑と対照的に輝かしい未来を印象付けるが、目も眩むような輝きが過去の記憶を忘れさせてしまう危険性もある。しかし記念碑と合わさり、シンボル間の奇妙な連帯作用がそれを避ける可能性を担保している。すぐ近くにはかつての“壁”があり、そこには壁を越えようとして銃殺された者の墓がシンボルとして存在する。あるい

は犯罪の合法的組織、例外状況をそのまま具現する場所、ファシスト社会主義国家警察の内閣府があり、発掘されたSS本部の跡などがある。この街は忘れ去られた無数の物語を取り戻す場所であり、ノスタルジーに浸るスライド映写とは全く違う。しかし同時に自らの語りを細らせてしまうような危険を冒している街でもある。かつて屈辱の痕跡としてあった廃墟は、高まった再建熱に敵視され、解体の大騒によって廃墟そのものの力が殺されてしまった。これと同じ熱狂によって、急速に近代建築が建てられ、完璧なまでの調和が保たれているかに見える。建築家は都市化の要請に答えたのだが、そこには語りの豊かさが減じられてしまう危険性もある。だがこうした中から、未来の形象が引き出されることもある。ソニーセンター⁴⁾の頂は、忘れてはならないものを果てしなく空に向けることによって引き受けているようだ。信じられないようなバランスでそびえているそれは、これからの数世紀を夢見る輝かしい方法なのかもしれない。氏はこのように締めくくる。「未来へのシグナルとなった過ぎ去ったシンボルの見かけ上の穏やかさの陰で、常に現在という時間において、あらかじめ決定されすぎた語りの枠組みに道を開くべく生まれた記憶のこどもたちがうごめくことだろう」。

暴力の風景

最後に荻野氏が監督したアニメーション映像「暴力の風景」が上映され講演がなされた。氏によればこの映像は「いじめ」という現象がある特定の風景において生じているとの仮説にもとづき作られている。風景は文章で表現し難い／し得ないが、実写では演者の個性が際立ち過ぎ風景そのものに肉薄し得ない。そこでアニメーションが選択された。ただしこの映像は暴力の風景を表現するだけでなく、社会調査の手段としても有用である。映像を見せることによって、見る者に衝撃を与え、様々な記憶が喚起され、語りが誘発される。さらにアニメに描かれたようにいじめが発生する／しないなど、いじめに関する人々の考えを引き出すことができる。このことはたとえば他の

講演者による次のような評価からも分かる。コルバン氏は、「映像が衝撃的で描かれている内容がとても恐ろしく不安が感じられた」という。またジュディ氏は、「実写ではなくアニメが使われたことによって、非現実的であるからこそ、大きな効果を生む成功した映像である」という。このように表現し得ないものを表現し、記憶を喚起し、さまざまな語りを誘発する映像なのである。

以上の講演を踏まえ、全体討論では19世紀と現代の風景構築のさまざまな違い。歴史的記憶が風景に作用する諸要素、身体・空間・感性に対するアプローチにおける歴史学と社会学の方法の違いおよびそれぞれの利点、表象し得る／し得ない（語りうる／得ないもの）の特徴と、表象し得ないものを表象するための方法の探求について活発な議論が交わされた。

注

- 1) ダニエル・リベスキント (Daniel Libeskind) 設計。2001年公開。その内部は、行き止まりの階段、閉所、ただ何もない空間、瓦礫にも見える柱の重なりなど意図的に入館者を戸惑わせるような設計がなされ、迷路のように入り組んでいる。展示の面でも死者の顔のように見える無数の鉄製の人面が引き詰められたものを、入館者が見下ろさなければならぬよう仕向けるなど、死や絶望を想起させるものがあるかと思えば、空からの光の指す長い階段は天国や希望を想起させる。そのどれもが多様な解釈に開かれており、入館者がさまざまなものを想起するように作られている。
- 2) 芸術家ヨヘン・ゲルツ (Jochen Gerz) による。彼はこの記念碑について「過去のある中心にある核心に近づくためには、作品はその存在を犠牲にしなければならない」と語る。
- 3) ピーター・アイゼンマン (Peter Eisenman) による作品。起伏のある1/5ヘクタールの地面に形は同じで大きさの違う暗い色をした無数のコンクリートの柱がたっている。
- 4) 2000年にグランドオープンした企業・娯楽施設などが入る7つの建物によって構成された巨大建造物。中央広場の屋根は透明の皮膜と白い羽が合わさったようなかたちをしている。ソニーセンターが建っているポツダム広場は、戦前に繁

華街であったものの、WWIIで徹底的に破壊され、その後は東西に分断されていた経緯がある。